

税務経理

目次

●昭和24年10月25日 第3種郵便物認可●発行/毎週2回火・金曜日(但し祝日を除く)●発行所/時事通信社 東京都中央区銀座5丁目15番8号 〒104-8178
©時事通信社2012

フォーラム

ホリスティック会計観の実名

名古屋大学大学院教授
佐藤 倫正

米国の財務会計基準審議会(FASB)が1976年に米国会計の概念フレームワークを作ろうとしたとき、三つの対立する会計観を提示した。第1は、損益計算を重視する収益費用観、第2は、財産計算を重視する資産負債観。この二つは相互連携を重視するとした。そして第3は、何を重視するか明確でない非連携観という対比だった。この誘導に多くの会計人が乗ったため、第3の会計観はほとんど無視された。

21世紀になって、米国の同時多発テロなどを経

て、今は超国家組織の国際会計基準審議会(IASB)が国際会計の概念フレームワークを作成している。そのIASBの会計観が、会計測定を扱うプロジェクトの「スタッフ報告書」(2010年7月)で明らかになった。第1は損益中心観、第2は財産中心観、そして第3がホリスティック観という対比で議論が進められている。この間の時の流れは、会計観に関する両審議会の立場を劇的に変化させたようだ。第1が損益計算書重視、第2が貸借対照表重視、第3がキャッ

シュフロー計算書重視の会計観であることに変わりはない。そして、第3の会計観が資金観であるのに、その実名が伏せられているのも、30年ほど前と同じである。

大きな違いは、FASBが第3の会計観に「非連携」という灰色のベールを掛けたのに対して、IASBは「ホリスティック(holistic)」というパステルカラーのベールを掛けて祝福したことである。

ホリスティックに漢字を当てれば「全体的」だろうか。しかし、まだ意味は十分に伝わらない。それは「あるものの構成要素は相互に密接につながっていて全体との関係でのみ説明可能であるという考え方に基づいた」という形容詞である(オックスフォード英英)。全てが構成要素に還元できるといふ考え方の対極にある。

このような哲学的用語が、ついに会計の世界に入ってきた。かつてFASBによって「つながりを重視しない」とされた第3の会計観が、IASBによって「つながりを重視する」会計観とされ、評価が逆転した。

IASBは、ホリスティック観というベールを取り払って資金観を表に出してくるのか。それとも、玉虫色の言葉などで使わないと決めて、資金観を再度お蔵入りにするのか。「スタッフ報告書」の段階なので、まだ予断は許さない。しかし、今回は期待が持てそうな気がする。



時事通信社